

古代大和は 自然要塞 四方を山に囲まれた肥沃の地 その大和への交通路を訪ねて【1】

古代大和の鉄の道【1】

5. 淀川・木津川から大和へ 大和の外港 木津「泉津」を訪ねて

古墳時代 瀬戸内海と大和を結ぶ鉄の道があった 卑弥呼が歩んだ鉄の道かも…



古代大和へ至る鉄の道 【 淀川・木津川 大和川 紀ノ川・吉野川 】

1. 古代大和への鉄の道

国のまほろば「大和」 大和は四方を山に囲まれ、外的を寄せ付けない自然要塞 その中に広大な肥沃の平野が広がっている。その中に 3世紀後半 邪馬台国・纏向そして大和初期王権が成立する。

その key となったのは朝鮮半島から大和への鉄の流入。「鉄の流入」が強力な農耕具・武器を生み、肥沃な土地を豊饒の地にかえ、文化を育み、大和を中心とした国家連合を形成する。

古墳時代前期 摂津・河内には暴れ川 淀川・大和川が瀬戸内海に流れくんだり、河内湖が広がる。まだ 馬がいなかった古墳時代前期 主要交通路は かわず時であったに 違いない。

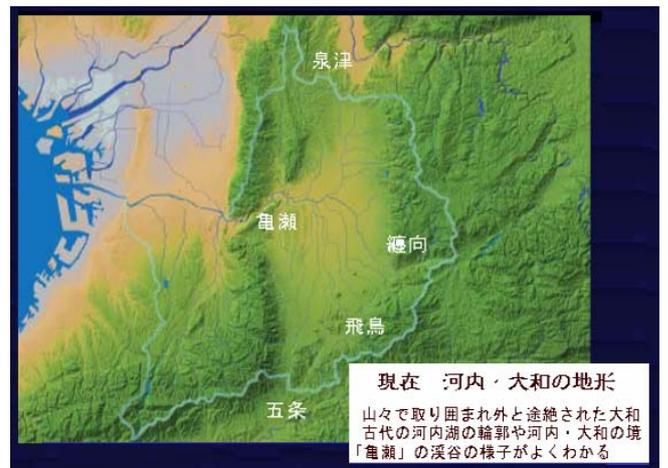
瀬戸内から大和への「鉄の道」はどこか・・・ 卑弥呼が通った鉄の道はどこか・・・

瀬戸内海・西日本の玄関口難波から大和への入り口は3つである

1. 西の淀川・木津川を遡って 山城から奈良山へ超えるルート 大和の外港 山城の泉津
2. 河内・大和をまっすぐに貫く最短コース 大和川ルート 大和の外港 河内の亀の瀬
3. 南の紀ノ川・吉野川を遡るコース 大和の外港 吉野の五条

いずれも 数々の歴史・伝説を刻み、また、数多くの渡来人が足跡を残した古道である。

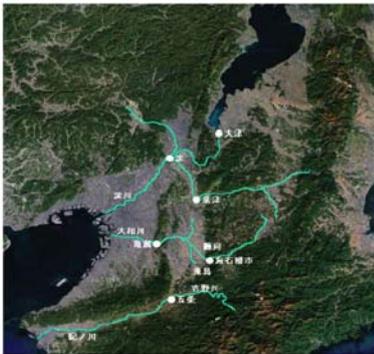
しかし 一番近い大和川ルートは河内と大和の境に二上山と竜田山に挟まれた溪谷・急流「亀の瀬」があり、ここで舟を降りて、急峻な山越(竜田越・大阪越)を必要とする難路である。一方、紀ノ川ルートは大きく大阪湾を南へ回らねばならない。その点、淀川・木津川ルートでは山城の泉津(現在の木津)からなだらかな奈良坂・平城山を越えれば大和。また淀川・琵琶湖を通じて 近江・日本海へ通じており、木津川をそのまま遡れば 伊賀・尾張・東日本へとつながる。5世紀日本に馬が入り、陸運が可能となり、また、数多くの渡来人が住み、河内が開発されるまでは 淀川・木津川ルートが大和への主要交通路の可能性が高い。河内開発・陸運整備に伴い 河内王権が成立する頃には、その中心は大和川ルートに移ったのだろうが……



いずれにせよ これら 3 つの大和へのルートは朝鮮半島・大陸から瀬戸内と大和を結ぶ古代「大和の鉄の道」である。

いずれも何度も通ったことがあるルートであるが、「鉄の道」として意識したことなく、これら3つのルートを「古代 大和の鉄の道」として、Country Walk を計画。

そのスタートとして 山城「泉津」の Country walk。平城山が本当になだらかなのか、昔のイメージを再度たどり、そして、卑弥呼の墓 箸墓など 前方後円墳発祥の纏向 そして その東 三輪山北麓の谷筋の古代鉄関連地「穴師」を訪ねました。



四方を山々に囲まれた自然要塞の地
 北側を 笠置・鈴鹿
 西側を 河内との壁 生駒・金剛
 東側を 音垣・室生・吉野
 南側を 紀伊・大峰

そして 大和へ至る道は
 北・中央・南の3方を流れる3本の大河のみである
 北端の外を淀川・木津川
 盆地の中を大和川
 南端の外側を紀ノ川・吉野川

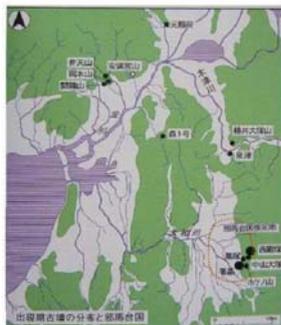
弥生・古墳時代
 河内湖 摂津は暮れ川淀川が流れ下る畿内
 大和はすばらしい肥沃の地であつたらう
 ここに唐古・鏡の弥生の大集落が生まれ
 纏向古墳群の畿内邪馬台国・大和三輪王権
 が誕生し、日本誕生のドラマが展開する



大和への西の入り口 木津川・泉津
 泉津から西へなだらかな平城山を越えれば大和



難波と大和を結ぶ最短コース 大和川の難所 亀の瀬
 ここで 舟を乗り換えねば大和へ入れない
 竜田越・二上山の大坂越の陸路でこの亀瀬を越える。



卑弥呼の邪馬台国そして大和王権が成立する3世紀後半
 大和が外に出る重要逃路はどのルートか・・・
 当時の最重要品「朝鮮半島の鉄」
 馬がない時代 瀬戸内海につながる難波から大和への道は水路 淀川・木津川と大和川。
 でも 大和川には河内と大和の境の溪谷 亀瀬の急流が立ちはだかり、亀瀬の手前で陸路で南岸の急峻な二上山または北岸の難路竜田川越えをせねばならぬ。一方 淀川・木津川は摂津を山背の泉津まで選れ、ここからはなだらかな平城山を越えれば大和。
 5・6世紀 馬が入り、河内王権が成立するまでは、この淀川・木津川が初期大和王権の主要交通路か・・・
 大陸と大和を結ぶシルクロード以前の古代鉄の道・Iron Road
 卑弥呼の道でもある。



笠置の山中から平野部山城・木津に出て摂津を流れ下る淀川・木津川
 この木津から東になだらかな平城山を越えると大和である

淀川・木津川から大和へ 山城・木津「泉津」周辺



瀬戸内から大和への最短コースは大和川の遊行 でも 河内と大和の境亀の瀬の急流が立ちはだかり、河内から陸路急峻な二上山を越えねばならず、通商路としては厳しい

大和川から大和へ 大和川の難所 亀の瀬周辺

2. 淀川・木津川水系の大和の外港 木津「泉津」を訪ねて 2007. 3. 23.

古代 大和への道 山城 木津より東の平城山を望む 木津川・泉津周辺 2007. 3. 23.



大阪湾から北東へ 36km 男山と天王山に挟まれた八幡で淀川が木津川・宇治川・宇治川から合流する。

一番西側の木津川はここから東へ南山城を遡り、合流点から約 25km 木津で北に大きく方向を変えて 笠置・伊賀の山間の上流部に入ってゆく。

山間部から平野部に流れ出た木津川が大きく東に方向を変える周辺西岸が古代からの大和の外港「泉津」・木津の街が広がり、対岸の東岸側が高麗の町である。

東から西に遡ってくる木津川に並行する南側に京阪奈丘陵がつらなり、関西学園都市ができて、今急速に市街化が進んでいるが、まだ木津川に沿う周辺はのどかな田園地帯である。

この木津から西になだらかな奈良山の丘陵地帯が連なり、この奈良坂を上り約 7 キロほどで奈良市の中心街東大寺大仏殿の横に出る。

興味は古代「泉津」の港はどんなところだったのだろうか また 卑弥呼の鉄の道が本当に存在したのか??

対岸の「狛・高麗」は名前が示すとおり、朝鮮半島渡来人の郷 そして その山裾椿井の集落には 40 面に近い卑弥呼の鏡 三角縁神獣鏡が出土した卑弥呼の古墳時代前期の前方後円墳。この木津川が大和の重要拠点として反映したのは間違いのない。そんな 痕跡もあるのだろうか…

また 記憶では奈良坂の言葉があるように緩やかな平城山を越え、ちょうど峠が般若寺。

本当に古墳時代 安心して越えられたのか?? そして 木津川から大和を目指した人たちが行き着く先 当時の都「纏向」まで足を伸ばして 三輪山北麓の鉄の郷 古代鉄関連地名「穴師」穴師坐兵主神社を最終ポ



イントにしよう。

全部歩いたわけではありませんが、バスに乗ったり 桜井線にのり継いだりで 古墳時代 東から大和を西に抜ける鉄の道「卑弥呼の鉄の道」Country Walk

古代 大和への道 山城の大和の外港 木津川・泉津周辺 2007.3.23.



古代 大和への道 山城の大和の外港 木津川・泉津周辺 視泉大橋の上・下流 2007.3.23.



古代 大和への道 山城の大和の外港 木津川・泉津 上郷遺跡 2007.3.23.
この木津川南岸には 古代 奈良時代 木津川木津に築かれた官舎があり、獨立柱遺物が立ち並び、楕円や数多くの遺物が出土した



木津・泉津の対岸 狛・高麗から 上流 加茂・笠置方面 2007.3.23.
加茂・笠置の山中を出て、南下してきた木津川が木津で大きく北へ反転して 山城の平野を流れて淀川に合流する

木津・泉津の西岸 古代渡来人の郷 山城 狛の里 高麗寺跡 2007.3.23.

高麗の郷の北側の山裾が橋井の集落 40面近くの三角縁神獣鏡を出土した古墳時代前期 卑弥呼の時代の前方後円墳 橋井大塚山古墳がある



高麗寺跡 [国史跡(飛鳥時代) 昭和15年指定]
高麗寺は、7世紀前期(飛鳥時代)に創建されたのが国史古の仏教寺院のひとつです。この地がかつての桓斐郡大前郷に属することから、朝鮮三国のうちの一つ高句麗からの桓斐系氏族、新氏とのつながりが指摘されており、文献資料からは、天平年中(奈良時代)に存在したことが「日本書紀」に記されています。伽藍は本津川を見下ろす台地上に南面して立地し、西に金堂、東に塔をもつ法起寺式の伽藍配置となります。塔、金堂、講堂は整った瓦葺基礎を有しており、講堂の両側から伸びた回廊は塔、金堂を囲んで中門に接続します。寺域は東西に約200m、南北に約190mの規模をもち、その周辺には、講堂塔に目かれた瓦を生産した高麗寺瓦窯や高井手瓦窯が存在し、北方には高麗寺造瓦氏族のものと考えられる大塚山古墳跡(上郷車道跡)が見えています。





2. 1. 山城と大和の境 木津 古代大和の外港「泉津」 2007. 3. 23.

遡ってきた木津川が この木津で大きく方向を変え 笠置の山間へ向かう

3月23日朝 JR木津駅に降り立つ。駅前からまっすぐ西へ木津川の土手へ。10分ほどで奈良-京都を結ぶ国道24号線の木津川にかかる橋に出る。「泉大橋」の名前があり、橋の横の土手に3つの川の合流点御幸橋まで25kmの標識



があり、土手に沿って南側にサイクリングロードが合流点に向かって続いている。

泉大橋と平行して、北の上流側にJR奈良線の鉄橋で橋の手前が木津橋を渡ると狛である。

ちょうどこの泉大橋がU字に曲がる木津川の底のところになっていて、川幅が広く 川原に砂州が広がっている。

「泉大橋」の名前からしてこの地が古代の「泉津」だろう。

橋を渡らず、少し下流側の下って河原に下りる。



木津川が大きくU字に曲がる泉津大橋周辺 この周辺が古代大和の外港「泉津」 2007. 3. 23.

広い河原が広がり北から流れてきた川がU字に京都の方へ曲がっている。すぐ土手の下が木津の市街地で、後で木津の街で聞いたのであるが、U字に曲がるあたりに もともと旧の橋が架かっていて、木津の街の中心を通りぬけ、奈良へ向かっていた木津の街で聞きました。昭和20数年に台風の大水で流され、現在の泉大橋がかけられ、道が北側に付け替えられたという。沢山の川舟があり、土手の下に大きな灯籠があり、町の入り口だった言う。

「泉津」の港の位置の話になるとみんなばらばらで もっと南という人 今の橋の上流側という人 みんなバラバラで この広い河原一体が泉津だったのだろう。

もっともこの「木津」の地名の話になると「奈良の大仏の銅や大仏殿の木材をこの木津で陸揚げし、奈良坂を越

えて奈良に運んだ場所だから「木津」という」と皆異口同音の自慢するのである。また、この街の入り口近くのお寺には和泉式部の墓もあった。みんな奈良はすぐ隣だといひ、土手から西を見ると奈良の新しい家並みが見える。平城山は木津の市街地の屋根に見え隠れしてやっぱり低い。やっぱり くだらかな丘陵地で木津からは奈良へ容易に越えられそうである。土手をおりて、市街地を通過して JR 木津駅の前の国道 24 号線の交差点に立って奈良側を見ると一筋の街道が緩やかに奈良坂へ向かっているのが見える。



木津川の土手の下街の入り口の灯籠



木津川の土手から木津の街越しに平城山を見る



木津の街にある泉式部の墓



JR 木津駅前国道 24 号線 奈良-京都街道から奈良方面 平城山へ緩やかな坂が続いている

木津川を遡ってきた物資がこの木津で陸揚げされ、平城山を越えて大和に運ばれた。大和が日本の中心として登場する古墳時代初期 もっとも重要な産品は「朝鮮半島の鉄」。渡来人も含め、数多くの人たちがこの地から大和へ登って行ったに違いない。古墳時代の「鉄の道」卑弥呼の鉄の道が見えてくる。

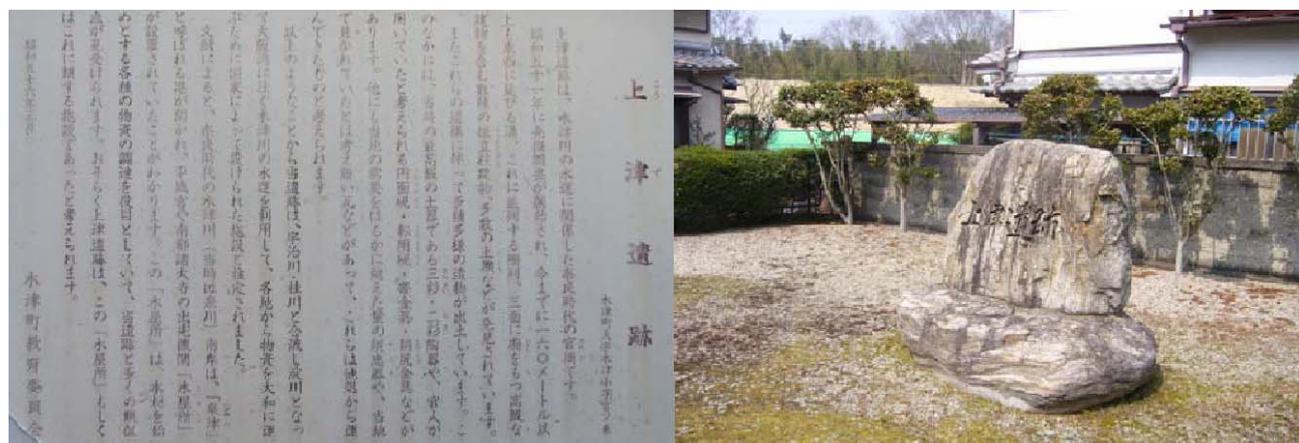
もう一つ「泉津」の位置や痕跡がないか 教えてもらうため、木津の教育委員会を訪ねる。

やっぱり「泉津」のあとは泉大橋一帯というほかないが、泉大橋の上流側の JR 鉄橋の北側の土手の下に奈良時代木津の水運と関係した掘立柱建物群が出土した官衙跡「上郷遺跡」があると聞き、簡単な木津の歴史地図をもらって「泉大橋」の上流側の「上津遺跡」に行きました。

教育委員会の人から、「御霊神社の森の裏の住宅地のほんの一区画に碑があるだけで、まったく港のイメージは沸

かないよ」と聞いていたのですが、壁のように高い土手の下 新興住宅地の中の1画に「上津遺跡」の碑がありました。大きく築かれた木津川の土手の上に上がると上津遺跡がある新興住宅土手は、おまけに土手下の河原にはブッシュが広がっていてまったく川が見えませんでした。

遠く東の加茂・笠置の方へまっすぐ伸びる大きな土手を見ているとこの土手に沿って大きな港湾都市が広がっていたと思えてくる。(卑弥呼の時代にはまだ さほど大きくはなかったかも知れませんが…)



奈良時代 木津川の水運の官衙の掘立柱建物群が立ち並んでいた上津遺跡 2007. 3. 23.

昭和和51年からの発掘調査で、160メートル以上も東西に延びる溝、これに並列する柵列、三面に廂（ひさし）をもつ高級な建物を含む数棟の掘立柱建物、多数の土壌などの遺構を発見。また、当時の最高級土器である三彩、二彩陶器や、官人が用いていたと考えられる円面硯、転用硯、帯金具、鞆尻金具などが出土。また、当地の需要をはるかに越えた量の須恵器や、当地で葺かれていたとは考えがたい瓦などがあって、これらは他の処から運んできたものと考えられます。以上のようなことから、当遺跡は、宇治川、桂川と合流し、淀川となって大阪湾に注ぐ木津川の水運を利用して、各地から、物資を大和に運ぶために国家によって設けられた施設と推定されました。

文献によると、奈良時代の木津川（当時は泉川）南岸は「泉津」（いづみつ）と呼ばれる港が開かれ、平城宮や南都諸大寺の出先機関「木屋所」（こやしよ）が設置されていたことがわかる。この「木屋所」は、木材をはじめとする各種の物資の調達を役目としていて、当遺跡と多くの類似点が見受けられる。

上津遺跡に掲げられた案内板より

2.2. 泉大橋を北に渡って 渡来人の郷 高麗・椿井大塚山古墳へ 2007. 3. 23.

対岸の「狛・高麗」側から再度 広がりを見ようと土手を降りて、泉大橋をわたる。

「狛・高麗」の名前が示すとおり、朝鮮半島の渡来人が数多く住んだところであり、また この泉津の守りの役割を担ったのだろう 卑弥呼の鏡 三角縁神獸鏡が40面近くも出土した椿井大塚山古墳も対岸すぐである。



古代 大和への道 山城の大和の外港 木津川・泉津周辺 現泉大橋の上・下流 2007. 3. 23.



木津・泉津の対岸 狛・高麗から 上流 加茂・笠置方面 2007. 3. 23.

加茂・笠置の山中を出て、南下してきた木津川が木津で大きく北へ反転して 山城の平野を淀で淀川に合流する

泉大橋そして対岸に渡って北へちょうど上津遺跡の対岸のあたりから見る木津川周辺は下流側よりもさらに川幅が広く、まっすぐに北へ加茂・笠置から伊賀の方へのびていて、この土手から見る対岸の「上津遺跡」周辺はまさしく数多くの舟がつける港湾都市「泉津」にふさわしい。

また 土手にはまっすぐ木津川に沿って 加茂から笠置・伊賀と山間を通り抜け伊勢・尾張へ抜けてゆく幹線

道路国道 163 号 古道 伊賀街道が延びる。

また、土手の西側には広々とした「上粕」の素晴らしい田園地帯が広がり、その田園のど真ん中に太い木々が見える盛土高麗寺跡が見える。

木津・泉津の西岸 古代渡来人の郷 山城 粕の里 高麗寺跡 2007. 3. 23.

高麗の郷の北側の山裾が椿井の集落 40 面近くの三角縁神獸鏡を出土した古墳時代前期 車弧呼の時代の前方後円墳 椿井大塚山古墳がある



高麗寺跡 [国史跡(飛鳥時代) 昭和15年指定]

高麗寺は、7世紀初頭(飛鳥時代)に創建されたのが国内最古の法興寺院のひとつです。この地がかつての相楽郡大前郷に属することから、新羅三國のうちの一つ高句麗からの渡来系氏族、新氏氏のかかわりが指摘されており、文献資料からは、天平年中(奈良時代)に存在したことが「日本霊異記」に記されています。伽藍は本洋川を見下ろす台地上に南面して立地し、西に金堂、東に塔をもつ法起寺式の伽藍配置となります。塔、金堂、講堂は整美な瓦積基壇を外装としており、講堂の両翼から伸びた回廊は塔、金堂を囲んで中門に接続します。寺域は東西に約200m、南北に約190mの規模をもち、その周辺には、講堂跡に置かれた瓦を生産した高麗寺瓦窯や高井手瓦窯が存在し、北方には高麗寺造瓦氏族のものと考えられる大規模な回廊跡(上粕車道跡)が発見されています。



田園のなかにたたずむ高麗寺跡は、7世紀初頭(飛鳥時代)に創建された国内最古の寺院跡のひとつで、高句麗からの渡来氏族粕(高麗)氏の氏寺として創建されたと考えられています。高麗寺は、文献資料から天平年中(奈良時代)に存在したことが「日本霊異記(にほんりょういき)」に記され、その他「今昔物語集」にも説話が収録されています。伽藍(がらん)は、木津川を見下ろす台地上に南面して立地し、西に金堂、東に塔を持つ法起寺式の配置となります。塔、金堂、講堂は整美な瓦積基壇を外装としており、講堂の両翼から伸びた回廊は塔、金堂を囲んで中門に接続し、寺域は一辺が約 200 メートルの規模であったと考えられます。
現地案内板より

高麗寺跡から田園地帯を抜け、山裾に沿って上粕を西へ向かって歩くと JR 奈良線も山裾に左手からよってくる。木津川も平行して流れ下るがこの上粕周辺は木津川からは一段高い丘陵地で川はずっと南側である。

上粕から起伏の多い丘陵地の山裾を 30 分ほど歩くと上粕集落を抜け、椿井の集落に入り、山裾 JR の線路沿いに椿井大塚山古墳の標識。



上粕椿井の集落 2007. 3. 23.

地図で見る椿井大塚山古墳は JR の線路の北側なのに??とちょっと混乱。

大塚山古墳に登って判ったのですが、JR 奈良線が前方後円墳の前方部と後円部の境を貫いていて、また前方部の上に住宅が立っている。



家が建つ古墳前方部



古墳後円部



前方部と後円部の間を JR が貫く



椿井大塚山古墳の頂上から 南を東西に流れ下る木津川を眺める 2007. 3. 23.



椿井大塚山古墳 [国史跡(古墳時代初頭) 平成12年指定]
 椿井大塚山古墳は、本津川を築む段丘上に立地する古墳時代前期前期の前方後円墳です。墳丘の規模は、全長約175m、後円部径約110m、前方部長約80m、前方部幅約76mを測り、高さは後円部約20m、前方部約10m程度であったと考えられます。築造時期は、奈良県桜井市の若菜古墳を母型とする定型化した前方後円墳の出現時期(『歴史散歩』にあり、いわゆる聖徳太子時代の古墳です。
 昭和28年(1953)、古墳後円部を擁する築造の改良工事が実施され、偶然に発見された型式石室から、三角縁神鏡(三士数面を含む四十面近く)の副葬品やおびただしい量の副葬品が出ました。三角縁神鏡については、聖徳太子の女王卑弥呼が中国の魏の皇帝から贈った鏡とする有力な説があり、この古墳は聖徳太子の所在地論争ともからんで注目されています。
 椿井大塚山古墳は、古墳時代成立の礎を築く古代国家成立上の記念碑的遺跡です。



大塚山古墳の頂上からは素晴らしい南山城の狭い平野部を流れ下る木津川が眺められた。

卑弥呼の時代 大和への入り口と大動脈 木津川 を守る重要ポイントとして、大和と連合する豪族がこの地を守っていたのだろう。木津と椿井大塚山古墳がこんなに近い位置関係にあるなど知りませんでした。

古墳時代 突如 大和纏向に巨大な前方後円墳が誕生し、大和王権の勢力を中心に日本が誕生する。

それまで、大陸・朝鮮半島と関係の深い九州勢力に変わり、大和の勢力(大和へ入った連合勢力も含め)が朝鮮半島の鉄を支配して、その鉄をもとに 勢力を伸ばし諸国を支配下に置いてゆく。

そんな諸国と大和を結ぶ大和の大動脈が木津川・淀川の水路であり、古代日本誕生に大きな役割を演じた「鉄の道。そして 大和の外港 山城泉津地域が大和へ入る入り口として 大和の最重要地域であったとますます日本誕生の鉄の道 卑弥呼の鉄の道のイメージが広がる泉津 Country Walk でした。

次はそんな この鉄の道の重要ポイント 平城山越 そして 終着点纏向・三輪山へ

3. 木津・泉津と大和の境 平城山越

この日は纏向まで出かけたかったので、平城山越は JR 奈良線に乗って、電車の車窓から平城山越えを眺める。

木津から 10 分ほどで平城山駅を経て奈良駅である。木津の町並みを抜けると丘陵地の間を電車が進む。空が常に開いているので 丘の間すすむ感じである。

線路に沿って 24 号線の新道の坂道がまっすぐ奈良へ登ってゆくのが見える。



木津から奈良へ JR 電車で平城山を越える 2007. 3. 23.

地図で標高をしらべると木津の市街地が標高 30m ほどで奈良坂の峠となる般若寺・奈良阪で標高 110m 前後なので、高度差もたいしたこともなく、古代においても平城山越はさほど苦労しなかつたろう。

でも 電車で越えたのでどうも迫力がない。

4 月 9 日再度奈良へ行く機会があったので、平城山の峠部で奈良 - 京街道の基点といわれてきた般若寺・奈良阪を訪ねた。奈良の東大寺大仏殿の横からまっすぐ東に街中を旧奈良 - 京街道が奈良坂をのぼって、般若寺の三門前を通り、奈良阪から下り坂を木津へと下って行く。

数十年前 まだ畑が広がる般若寺周辺から奈良坂を下らず北へ滝坂・柳生への道を数度歩いたことがあるのですが、今はすっかり市街地になっていて、バイパス道路からはずれる般若寺山門前周辺が古い街道筋の面影を残している。

桜満開の般若寺でしたが、5 時前で般若寺には入れませんでした。古い家並みが続く山門前の京街道を西の木津へ向かって歩く。





平城山の峠部の般若寺・奈良阪周辺 般若寺の山門と山門前を東西に伸びる旧奈良-京街道 2007. 4. 9.

旧京街道をゆっくり歩いて奈良阪のバス停のところでバイパスのバス道と合流する。ここから西木津側は家並みが途絶え、丘陵地のなだらかな坂を木津へくだってゆく。

バス停で時刻表を見るとラッキーなことに木津から高麗へ下って行くバスがあり、バスで木津まで平城山を下る。



奈良阪バス停前から木津方面



奈良阪バス停前から木津方面



ラッキーにも乗客少なく、一番前でゆっくり下っていく奈良坂をごきげんで観察。

ゆったりした傾斜の坂道をくだって、15分ほどで木津の駅前に戻りました。

古代とはルートを含め、ずいぶん違うでしょうが、ゆったりとしたこの坂道が大和と大和の外港「泉津」を結ぶ大動脈 大和の鉄の道。諸国の人々・渡来人 そして 鉄や諸国の物品がこの道を行き来した。

古代この坂道をこの坂道を卑弥呼も行き来したのだろうか・・・

うれしくなってしまったバスでした。

2007. 4. 9. 夕闇の奈良坂をバスで木津へくだりながら Mutsu Nakanishi



木津・高麗行のバスに乗って 奈良坂を木津へ下る 2007. 4. 9.

瀬戸内海から大和へ 古代和鉄の道 大和の外港 木津川「泉津」から平城山を越えて大和 纏向へ

室埴時代の前期 高野町の時代 大和纏向に寄墓など巨大な前方後円墳を持つ跡が確認 して、三輪山の穴師と大和の初期王権が誕生してゆく
そのキーワードは朝鮮半島の鉄 鉄の穴師への流入が新しい時代を築ける シルクロードの船にせよ 古代の鉄の道が大和へ続く
また、高が自由に出入る 川の木津川は重要な交通路 大和川の敷設に比べ、北朝鮮半島と和泉川からの道が大和を支えたのか……



室埴の山中から早野郡山城・木津川に出て括津を流れる淀川・木津川この木津から東に広がる平城山を越えると大和である
淀川・木津川から大和へ 山城・木津「泉津」周辺



木津の舟場より平城山・泉津 泉津一帯の風景 泉津の神楽盆 泉津の山 泉津の山

奈良駅の神楽盆 奈良駅 神にみる船着きの山門前から旧京街道が木津・京都へ坂を下ってゆく 2007. 4. 9.



4. 三輪山麓 古代大和の中心地 纏向・古代鉄の里穴師を訪ねる 2007. 3. 23.

2007年3月23日午後おそく桜井線纏向の駅に降り立つ。

3世紀後半 前方後円墳が生まれた土地で、卑弥呼の墓といわれる箸墓がどっしりとした姿をみせ、その周辺にぼつぼつ前方後円墳の森が田園の中に点在している。

そして、その後ろに大和三山 東にはどっしりと三輪山がそびえている。大和の外港「泉津」から大和を南北に伸びる古墳時代から古代に至る大動脈 大和の鉄の道の終着点である。そして この纏向からまっすぐ東に三輪山の北麓に伸びる田園道をたどると古代鉄の集落「穴師」。穴師の地名が示すとおり、古くから金属精錬・鍛冶集団のいた集落で、纏向・初期三輪王権王権を支えた集団であるかもしれない。集落の一番奥にスサノオ やオオナムチの製鉄神を祭る古い兵主神社がある。是非 行きたい場所だったところでした。



国のまほろば 纏向遺跡を望む 三輪山北西山麓 穴師の里より



纏向から三輪山の北麓に谷筋を少し登ったところが「穴師」の跡
「穴師」の名が示すとおり、鉄・金属精錬と関係する集団の里で、里の一番奥に穴師坐兵主神社がある。兵主神とは、漢の高祖が「蕭尤(シユウ)」を祀って勝利を祈った事に由来するといわれ、武器製造の鍛冶神。兵主神を天日矛とする説もある。穴師坐兵主神社は穴師坐兵主神社、巻向坐若御魂神社(式内)、穴師大兵主神社の3社を室町時代に合祀。穴師坐兵主神社にスサノオの命をまつり、巻向坐若御魂神社にワカニムスビの命をまつり、穴師大兵主神社にオオナムチ(大田主)、あるいはアメノウズメの命をまつっている3社敷が向かって右から並立している。



大和 纏向遺跡の夕景 箸墓の後ろにほんやりと大和三山がかすんでいる

纏向 三輪山古墳群の上より 2007. 3. 23.

古代大和の鉄の道 の終着点 三輪山麓 穴師の集落からは夕闇迫る纏向の前方後円墳

そしてその後ろに大和三山がシルエットになって浮かんで素晴らしい景色。

暮れ行く纏向の景色を眺めながら 古代 朝鮮半島から大和への「鉄」の旅路を思いめぐらしていました。